小川正二先生を偲ぶ

中山輝也*

小川正二先生に初めてお会いしたのは確か昭和40年の初め頃だと思う。その時、私は新潟県土木部河川開発課に在職しており、たまたま何か小さな学会か何かの集まりがあったときと記憶している。私より一才上の先生も未だ30才を越えたばかり。東北大学河上義房先生の教え子であり、文字通り新進気鋭の助教授だった。その後、なんとなくうまが合い長岡の工学部のプレハブ校舎を訪ね歓談したり、どちらから誘うこともなく夕闇が迫ればお酒を酌み交わしたものだ。

新潟大学工学部が新潟へ移転しても長岡市を離れず長岡技術科学大学へ移られた。

もともと生真面目な先生は学生に熱意を込め指導に当たっていた。この度の地震で再度被災した「蓬平地すべり」で、指導していた学生が車の運転を誤り、大きな事故を起こし、助手席に座っていた先生は重症を負われた。本当に心配したが、奇跡的に回復された。まさに「九死に一生」とはこのことだろう。ホッとした。強運な方なのだ。

私共の仕事も単純な調査から先端的で高度な数値解析などへ進んでいく中で、数々のご指導を賜った。長岡市方面へ出掛けると必ず大学にお寄りし、自ら入れられたお茶をご馳走になった。それは私だけではなく同じ技術を志す全てのものに分け隔てなく行っていたと聞く。

新潟県内の社会資本整備の円滑な遂行についての行政を中心とする各種委員を本来の研究の間に引受けられ、新潟県内に多大な貢献をされたことは誰もが認めるところである。

一方、昭和37年創立の当会も一時中断した時期があった。それを長岡技術科学大学に在職していた池田俊雄教授がみかねて私に当会の再開に努力するよう要請され、世話役の一人として応用地質を志す皆に改めて再開を呼びかけ、創立期の人達の世代交代を行って再出発し、現在のような活発な活動に戻ったのである。

池田俊雄会長が定年退官の際、私に「次期会長は地質屋でなくともいいね」とおっしゃった。無論、異論はなかった。先生を会長に推薦することが読めたからである。長岡高専の校長に就任されてからも教育の傍ら、会長としてリーダーシップを発揮して下さった。小規模だったこの会も先生のご活躍、ご指導で今のような立派な地方の学会として全国でも認められる存在となったのである。

私ごとながら、平成元年に社会貢献の一つとして財団法人環境地質科学研究所を設立した際、真っ先に先生に評議員に加わっていただいた。その後15年程お世話になった。先生

*㈱キタック

が長岡工業高等専門学校を退官された頃から「体調が悪いので」と奥様から評議員辞任の申し出があり、理事会でやむを得ず承認した。何か長年の労苦に報いるため記念の品をお贈りしたいと考え、クリスチャンである先生に知足美術館で制作してあった「異人池とカトリック教会」のリトグラフ額をお送りした。直ちに奥様からお手紙が届き、そこには先生のお気持ちがしたためてあった。

昭和30年代の中端からようやく世間から脚光を浴びてきた応用地質の分野の先駆者として常に『人を大切に』『思いやり』を念頭に、今では当たり前のことだが民間と大学連携を目指し、大学を一層身近なものとするよう努力され、さらに地域社会への貢献を心掛け、大きくは悪化の一途を辿る地球環境を憂いてこられた先生を失うことは惜別の情堪え難いものがある。

新潟応用地質研究会　意見交換会　会場にて（2001年12月７日）